

朝鮮民主主義人民共和国芸術団の対日文化外交

平壤学生少年芸術団日本公演の事例研究

森 類臣

(摂南大学)

はじめに

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が大規模な芸術団を初めて日本に送ったのは1973年であった。この芸術団とは、平壤歌舞団を再編成する形で1969年9月27日に創設された万寿台芸術団であった。万寿台芸術団は、五大革命歌劇である「血の海（피바다）」「花を売る乙女（꽃파는 처녀）」などを主なレパートリーとして専門的に取り扱う血の海歌劇団とともに、1970年代を代表する芸術団であった。現在も芸術界の重鎮と見なされている。

一方で、森（2022）が指摘するように、血の海歌劇団と万寿台芸術団は、創立後間もない時期から北朝鮮の対外文化外交を担う重要な団体であった。日本においては特に、1973年8月から9月にかけて日本各地を巡回しながら芸術公演を開催した万寿台芸術団の印象は強かった。万寿台芸術団は北朝鮮の対日文化外交を具体的な形で可視化する存在であり、さらにその高い芸術的力量で北朝鮮に対する日本人の好感を勝ち取ることにある程度成功したのである（森 2022: 232）。

万寿台芸術団の日本公演は、北朝鮮芸術団による対日文化外交の先駆けであり、その後に続く芸術団訪日のための一種のモデルになったとも言える。事実、万寿台芸術団日本公演の後、北朝鮮の様々な中規模・大規模芸術団は1992年まで断続的に日本を訪問し、日本各地で巡回公演を行っている。国立平壤芸術団日本公演（1980年5～6月：第1回目、1990年9月：第2回目）、平壤学生少年芸術団日本公演（1978年5～6月：第1回目、1983年4～6月：第2回目、1986年5～

7月：第3回目）、普天堡電子楽団（1991年9月）、国立交響楽団日本公演（1992年6月）などである。これらは日本のマスメディアの強い関心をひいた。例えば、1980年の国立平壤芸術団の日本公演時には、『朝日新聞』紙上で民謡歌手のキム・オクソン（人民俳優）にインタビューした記事を掲載している⁽¹⁾。キム・オクソンは日本人観客のために「五木の子守唄」「佐渡おけさ」も披露した。

このようないくつかの芸術団の日本公演の中で、平壤学生少年芸術団の事例は特に目を引く。平壤学生少年芸術団は、1978年・1983年・1986年と3回に渡って行われ日本を訪問し人気を博したからである。繰り返し3回も日本公演を行った北朝鮮大規模芸術団は、管見の限り他にない。平壤学生少年芸術団の歌手・演奏者である児童／学生は「ピョンコマ（평코마）」と呼ばれ、在日朝鮮人の間でも、他の芸術団に比べ特に強い印象を残したようである⁽²⁾。第1回目の1978年公演時は、「ピョンコマ」は同年代の在日朝鮮人児童のスターになった。2002年に在日本朝鮮青年商工会が主導して4度目の平壤学生少年芸術団日本公演を計画したことがあったが、この時に計画の中心となったのはこの「ピョンコマ」世代であった⁽³⁾。

本稿では、1970～80年代に開催された平壤学生少年芸術団日本公演の背景・行程・公演内容・日本人観覧者の反応など基本的な事項を、新聞・雑誌資料・年鑑などの文献を使って整理する。そして、日本公演を北朝鮮による重要な対日文化外交の一分野と見なした上で、その意味を考察したい。

1. 先行研究の検討

北朝鮮芸術団の文化外交を扱った先行研究はいくつかあるが、ここでは本稿と関連の深い研究を3つ挙げたい。まず挙げられるのは、チョンヨンソン・キムジナ(2007)である。この研究は、『朝鮮中央年鑑』を主要資料として北朝鮮芸術団による対外公演を整理しており、対外公演が活性化したのは1980年代だとして、その嚆矢を平壤学生少年芸術団の対外公演、特に1978年の日本公演としている。この指摘は、管見の限り他の研究では見られないことであり重要である。

チョンヨンソン・キムジナは、北朝鮮芸術団の対外公演をして国家間関係を表象するものとみなし、その目的を①友好的協力関係維持の確認と親善(例えば中国・ソ連)②新たに協力関係をつくり維持するときの象徴③国家の発展を芸術的力量で表現し可視化することとしている(전영선 및 김지나 2007: 203)。対外公演の目的には概ね同意できるが、文化外交の対象国の体制や範疇(社会主義国圏カリベラル・デモクラシー国家か、第三世界の国々かなど)によって公演の性質が当然変わる。加えて、日朝間のように、複雑な過去の経験を共有している国家間では、文化公演が持つ意味はさらに多層化・多次元化せざるを得ない。この点は、より慎重に検討する必要がある。

また、平壤学生少年芸術団のような児童・学生芸術団と、成人を中心とする他の芸術団を同次元の枠組みでとらえてよいのかという疑問も残る。本稿で詳述するように、平壤学生少年芸術団の特徴の一つは児童・学生が中心の芸術団である点である。児童・学生のパフォーマンスから受け手(観客)が形成するイメージは「純粹」であり、成人が中心となる他の芸術団のイメージとは異なる。当然送り手(北朝鮮)もそのことを踏まえつつ公演内容を組み立てているだろう。

ちなみに、チョンヨンソン・キムジナは、平壤学生少年芸術団の対外活動の始まりを1978年の日本公演としているが、後述するようにすでに1975年にアルゼンチンで公演を行っており、このアルゼンチン公演が初演である点は指摘しておきたい。

第二に、ハスンヒ(2020)が挙げられる。ハスンヒは北朝鮮芸術団の訪日公演のみならず日本の音楽団(SHOW-YA などロックバンドを含む)の訪朝公演実施という相互作用を注目し、この相互作用を両国がそれぞれ政治資源として使用したことに言及した。また、本稿との関連では、1991年の普天堡電子楽団の日本公演が注目を受けた理由として1970～1980年代の平壤学生少年芸術団日本公演を挙げている。特に、第1回・第2回日本公演に参加した学生が、成人となり普天堡電子楽団訪日団のメンバーとして再来日したことへの大きな期待があったとしている(ハスンヒ 2020: 187)。

第三に、森(2022)が挙げられる。森は、北朝鮮が初めて大規模芸術団を日本に派遣した事例(1973年の万寿台芸術団日本公演)に注目し、公演の背景と実態、そして日本社会における影響とパフォーマンスの評価を吟味しながら国際関係史の一断面として描いた。ただし、あくまでも基礎的な研究にとどまっている。本稿も森(2022)に連なる研究となる。

なお、本稿は事実関係の整理と解釈を中心にした基礎的な研究にとどまるが、文化外交に関する理論的・概念的研究成果を援用することは重要である。文化交流と政治外交に関する研究に関する研究は、国際政治学および外交研究においては、J. ナイに代表されるソフトパワー論やパブリック・ディプロマシー研究が注目されてきた。また、大衆文化と国家イメージの関連性はもちろんのこと、トランスナショナルな動きであるファンダムとその政治社会的影響力に関する研究も近年では成果を挙げている。一方で、文化交流に関する近現代史研究も進んでいる⁽⁴⁾。遡及的になったとしても、これらの成果を踏まえて北朝鮮芸術団の対外公演を考察することは、北朝鮮による文化外交を今後再照射し特徴を抽出するためにも必要であろう。

2. 平壤学生少年芸術団の創立と日本公演の背景

2-1. 創立過程

平壤学生少年芸術団は1970年代に創設された。創設のきっかけについては、1966年8月から文

化省部長を務めた張徹の回顧録によると次の通りである。

学生少年たちの芸術活動を誰もが無視できなくなり、それが堂々と芸術外交圈に入るようになったのは1972年8月31日に偉大な首領が学生少年たちの芸術サークル総合公演をご覧になって「外国から学生たちの公演をたくさん招請してくるのだが、これに応じる運動をしましょう」と教示を下された時からであった。⁽⁵⁾

張徹によると、政府代表団等で平壤を訪問する外国人たちは、学生による水準の高い芸術公演を見て感激し、学生らを自国に招き公演を開催したいと希望することが多かったという。そのような外国の要人の中には、中国の周恩来やエジプト政府関係者がいたとも言及している⁽⁶⁾。

平壤学生少年芸術団の創設は、血の海歌劇団・万寿台芸術団が海外巡回公演を多数開催してその評判が定着した時期に当たる。このような背景および張徹の回顧を考慮すると、平壤学生少年芸術団は当初から外国公演を目的とする文化使節団として編成・創設されたことが分かる。最初の外国公演は、1975年のアルゼンチン公演であった。張徹は、初演の地がアルゼンチンだった理由について「遠距離の法則」（自国から最も遠い国を最優先にする程度の意味と推察）を適用させたと述べているが⁽⁷⁾、あまり説得力をもたないため、国際関係を考慮した別の決定的な理由があったと考えられる。ただし、それについては現時点では有力な論拠を発見できていない。ともかく、北朝鮮側の資料によると、平壤学生少年芸術団のアルゼンチン公演は高い評価を受け、訪問した学生たちは、「大統領から、彼が直接注文して作らせた78台の子ども用自転車（学生少年芸術団員数と同じ）とその他の真心のこもった謝礼品を受け取った」のであった。公演は成功裏に終わったようである⁽⁸⁾。

平壤学生少年芸術団は70年代後半の短期間に、アルゼンチンと日本以外にも、中国・インド・バングラディッシュなどアジア諸国、フィンランド・ノルウェー・デンマーク・スウェーデン・ユーゴ

表1 1970～1980年代における平壤学生少年芸術団の対外公演⁽⁹⁾

1975年	アルゼンチン公演 ※平壤学生少年芸術団の海外初公演
1976年	日本（第1回目計画→取り消し）
1978年	5～6月：日本（第1回）
1979年	1月：インド 3月13～27日：バングラディッシュ 6月：ユーゴスラヴィア 7月：アルジェリア 8月19～29日：フィンランド 9月1～9日：デンマーク 9月10～20日：ノルウェー 9月：中国
1980年	タイ
1983年	日本（第2回）
1984年	6月：中国 8～9月：ギリシア 9～10月リビア 10～11月：アルジェリア
1985年	5月8日～10日：マカオ 9月15～27日：イエメン 10月11日～18日：マルタ
1986年	5月28日～7月12日：日本（第3回） 10月25～11月12日：キューバ 11月12日～12月2日：ペルー 12月4～7日：ニカラグア 12月～1987年3月：インドネシア（平壤曲芸団と同行）
1987年	4月23日～6月9日：タイ
1988年	7月7日～8月9日：フランス

スラヴィアなどのヨーロッパ圏、アルジェリアなどのアフリカ諸国を訪問した。対外公演は1980年代になるとより活発化した。

平壤学生少年芸術団は、1963年9月30日に創設された平壤学生少年宮殿と強い紐帯を帯びている。平壤には芸術を教授する別の教育機関もあるが、平壤学生少年芸術団団員は基本的に同宮殿から選抜されたからである⁽¹⁰⁾。平壤学生少年宮殿は、小学生から高校生までの学生が芸術・体育・学術の多方面において学ぶことのできる総合的な学習センターである。学生は学校での授業を終えた放課後に平壤学生少年宮殿に通い、自己の才能を発揮できる分野もしくは自分の趣向に合わせた分野を学ぶ。平壤学生少年宮殿は北朝鮮が誇る学習の殿堂であり、1960年代のみならず現在に至るまで、平壤を訪問する外国人訪問団はここを見学することが多い。平壤学生少年宮殿は北朝鮮が繰り返し主張する児童教育思想、つまり幼少期からの徹底的な集団教育と高次元の教育保障を通して国を担う人材を育てること―北朝鮮はこれを「子どもは国の宝」という短いフレーズで表している―

を具現化する装置である。このような意味で、平壤学生少年芸術団は、公演を通して、その芸術的力量を育成し保障してくれる平壤学生少年宮殿を宣伝するものでもあったともいえる。

2-2. 南北芸術競争

平壤学生少年芸術団が初の日本公演を行った背景の一つに、大韓民国（韓国）の学生芸術団の存在がある。それはザ・リトル・エンジェルス芸術団である。同団は、伝統舞踊を得意演目とする団として1962年5月5日に創設された。団員は小学生・中学生を中心として構成されている。創設を主導したのは、世界基督教統一神霊協会（現、世界平和統一家庭連合）の文鮮明および韓鶴子である⁽¹¹⁾。

ザ・リトル・エンジェルス芸術団は1965年12月9日に来日し、12月10日から12日まで公演を行った（김희선 2022: 47）⁽¹²⁾。また、1969年に日本各地で巡回公演を行い、1970年12月にも来日し、12月25日から日本各地で約1か月公演を行った⁽¹³⁾。さらに、1972年11月9日から1973年3月4日にも日本公演を行い、東京・大阪・京都・名古屋などを始めとして多数の公演を行った⁽¹⁴⁾。（김희선 2022: 44）⁽¹⁵⁾。このときの約3か月に渡る長期の日本巡回公演はマスメディアの注目も集めたようで、『朝日新聞』（1972年11月17日）は「異例の長期公演」としている⁽¹⁶⁾。また、『読売新聞』（1972年12月12日）は、この時のザ・リトル・エンジェルス公演を次のように評している。

民族特有の芸術を他国で見せる場合には、いくつかの制約を乗り越える必要がある。いくらすぐれた土俗性を主張しても、それがそのまま共感をよび、外国人の感動に結びつくとは限らない。その点、リトルエンジェルスは伝統芸術に思いきったデフォルメを加え、ショー・ビジネスに徹きったところに特色があった。衣裳、楽器を土俗そのままに、踊りの“振り”は素朴な面影を残しながらも、かなり現代風なテンポで終始しているのである。⁽¹⁷⁾

『読売新聞』記事の批評が適切ならば、ザ・リ

トル・エンジェルス芸術団は伝統の忠実な保存ではなく、伝統の更新とそのショー化を通して民族芸術の世界的な拡散を狙ったことになる。この発想自体は、民族芸術の社会主義的改造を通して別次元に引き上げようとした北朝鮮の実践と似通うところがあった。

記事はさらに、ザ・リトル・エンジェルス芸術団の演目「人形の踊り」について「日ごろの訓練の度合いが見る側の胸に伝わってくる。邪心のない芸術表現とは、こういう舞台をいうのであろう」とある意味ナイーブに評している⁽¹⁸⁾。子どもによる芸術表現は純粹であるという命題は、ザ・リトル・エンジェルス芸術団の公演のみならず平壤学生少年芸術団の公演にも適用されていたものであり、少なくともマスメディアではこの命題を疑うような言説は管見の限りなかった。この命題がマスメディアなどを通して広く流布されたことは、日本において、ザ・リトル・エンジェルス芸術団や平壤学生少年芸術団に対する批判的なまなざしを制約した。

なお、ザ・リトル・エンジェルス芸術団は第13回海外公演期間（1974年10月20日～1975年11月24日）には、日本劇場で40日間の長期公演をおこなった（김희선 2022: 52）⁽¹⁹⁾。

1970年代はデタントが進んでいたとはいえども、森（2022）で指摘されている通り南北は芸術団の海外公演を通して文化外交を競い合っていた。文化外交で相手に勝利することは体制の優越性を宣伝する非常に良い機会となる。ザ・リトル・エンジェルス芸術団のような韓国芸術団の積極的な海外公演が、北朝鮮に刺激を与えつつ南北芸術競争の側面を帯び、平壤学生少年芸術団の日本公演実施に結びついていった可能性が指摘できよう。

2-3. 幻の1976年公演

日朝間でどのような交渉を経て平壤学生少年芸術団が日本に招請されることになったのか、その詳細は資料の制約もあって管見の限り確認できなかった。しかし、平壤学生少年芸術団の初めての日本公演は、実は1978年ではなく、それよりも2年早い1976年に開催される予定であったことは確認できた。この時の主催は日本・朝鮮文化交

流協会と読売新聞社であり、後援は日本テレビ放送であった。

1976年7月14日に平壤学生少年芸術団団長のユヨンテク [유용택] (当時、平壤学生少年宮殿副総長) ら5人で構成される事前調査団が来日した⁽²⁰⁾。15日に在日本朝鮮人総聯合会 (以下、朝鮮総聯) 中央本部を訪問し、続く16日に、李季白 (当時、在日本朝鮮人総聯合会副議長) とともに読売新聞社本社を訪問した。そして、原副社長・橋事業本部長・為郷編集局長と面会した。事前調査団は8月初旬まで日本に滞在し、公演会場の下調べおよび公演の打ち合わせをすると書かれている。この時点は、約150人で構成される芸術団が、9月末～11月まで全国10都市で公演を行う予定であった⁽²¹⁾。

『読売新聞』は8月10日に平壤学生少年芸術団東京公演の案内記事を紙面に掲載した。記事にはプログラムの簡単な説明と入場料・入場券前売り所・問い合わせ先が掲載されている⁽²²⁾。つづく『読売新聞』1976年8月11日は、団長のユヨンテクの単独インタビュー記事を掲載した。ここでは、ユ団長が日本公演の意義を語っている⁽²³⁾。

しかし、この公演については、確認できる限り8月11日の記事を最後に全く報じられておらず、公演を行った形跡がない。管見の限り中止の理由は不明である。8月18日には板門店の共同警備区域内で米軍と北朝鮮兵士がポプラの木の伐採をめぐる乱闘が行われ、米軍人が死亡、韓国軍人が負傷する事件 (ポプラ事件) が発生し朝鮮半島情勢が極度に緊張したことから、このポプラ事件が公演中止に影響を及ぼした可能性もある。

この中止の後、1978年に第一回日本公演が行われるが、主催者は日本・朝鮮文化交流協会単独となり、読売新聞社は降りている。

3. 平壤学生少年芸術団日本公演の分析

3-1. 第一回日本公演 (1978年)

1) 行程

平壤学生少年芸術団は1978年5月1日から6月14日までに滞在し、5月3日から6月13日まで各都市 (東京・大阪・京都・神戸・名古屋・福

岡・広島・姫路・下関・新潟) で公演を行った⁽²⁴⁾。公演の主催は日本・朝鮮文化交流協会であり、後援は日本放送協会 (以下、NHK) および朝日新聞社であった。

5月1日に平壤学生少年芸術団が中国民航チャーター機で来日した。芸術団は134名で構成された。団の重要幹部は、団長キムウジョン [김우중] (朝鮮対外文化連絡協会副委員長／最高人民会議代議員)、顧問カンジュイル [강주일] (朝鮮アジアアフリカ団結委員会副委員長)、副団長ホンイルチョン [홍일천] (普通教育部副部長) およびパクムンホ [박문호] (朝鮮対外連絡協会参事)、事務長キムシボム [김시범] (平壤学生少年宮殿総長) の5名であった。声楽部門20名、舞踊部門35名、器楽部門48名であった。また、演出等を行う指揮者・指導教員・演出家・照明係・演出装置係・記者・撮影係・医師なども同行していた。主な行程は表2のようである。

在日本朝鮮人総聯合会 (朝鮮総聯) 機関紙『朝鮮新報』は、平壤学生少年芸術団日本公演を1973年の万寿台芸術団日本公演の延長線上にあるものと見なし、今回の「《主体芸術の香り》を抱いてきた幼い使節たちとの感動的な出会い」によって「主体朝鮮の海外公民としての誉れと矜持」を持つことができるとしている。そして「格別な配慮をしてくださった偉大な首領に対する申し分ない敬慕と感謝の情」に言及している⁽²⁶⁾。

また、5月5日に開催された平壤学生少年芸術団を歓迎する在日本朝鮮人中央大会で、朝鮮総聯議長の韓徳銖は「平壤学生少年芸術団の日本公演は総聯愛国事業と民族教育、文芸事業をより一層発展させることにおいて意義深いこととなるだろう」という題目の演説を行った⁽²⁷⁾。同時に、芸術団団長のキムウジョンは同大会において「祖国の人民たちはこれからも国の統一と民族の繁栄のための総聯と在日同胞たちの聖なる愛国偉業を堅固に支持声援することだろう」という題目の演説を行った⁽²⁸⁾。平壤学生少年芸術団日本公演と朝鮮総聯による在日朝鮮人運動は密接な関係を有していた。折しも、平壤学生少年芸術団が来日する直前の4月28～29日には「1978年度総聯各級学校学生たちの中央芸術競演大会」が開かれ、全

表2 第1回日本公演の主な行程⁽²⁵⁾

5月1日	日本に到着 キムウジョン（団長）が羽田東急ホテルで記者会見 朝鮮総聯中央（朝鮮会館）訪問
5月2日	日朝文化交流協会・朝日新聞本社・東京都庁を儀礼訪問 美濃部亮吉（東京都知事）夫婦主催による歓迎宴
5月3～4日	東京公演（東京文化会館） 初演には日本人観客・日本駐在外交官・在日朝鮮人ら2300人が参席
5月5日	団代表がNHKの番組に出演 「平壤学生少年芸術団を歓迎する在日本朝鮮人中央大会」開催（東京朝鮮文化会館）
5月9日	名古屋公演（愛知県勤労会館） キムウジョンが朝日新聞名古屋本社を訪問
5月10日	キムウジョン・カンジュイル（顧問）・学生代表らがNHK中部本部を訪問
5月13日	キムウジョン（団長）が山田耕三郎（大津市知事）・鳥養健（京都市助役）と面会 キムウジョン（団長）・ホンイルチョン（副団長）・学生代表らがNHK京都放送局を訪問
5月13～14日	京都公演（京都会館）
5月16～18日	神戸公演（神戸国際会館）
5月17日	東神戸朝鮮初中級学校・西神戸朝鮮初中級学校を訪問
5月20～21日	大阪公演（大阪朝鮮文化会館）
5月22日	キムウジョンらが朝日新聞大阪本社を訪問 歓迎交流会開催（東大阪市立文化会館）
5月23～24日	大阪公演（大阪フェスティバルホール／堺市民会館）
5月25日	キムウジョンら広島県庁・広島市役所・NHK中国本部を訪問。
5月26～27日	広島公演（広島郵便貯金会館）
5月28～29日	下関公演（下関市民公演）
5月31日	福岡朝鮮初中級学校を訪問
6月1～3日	福岡公演（福岡市民会館）
6月6日	姫路公演
6月7日	東京歓迎交流会開催
6月8日	東京公演（NHKホール）
6月10～11日	東京公演（特別公演含む）（浅草国際劇場）
6月13日	新潟公演（新潟県民会館）
6月14日	新潟港から帰国

国の朝鮮学校から選抜された883名による芸術競演が開かれたばかりだった⁽²⁹⁾。

平壤学生少年芸術団は6月14日に帰国したが、北朝鮮で特に重要だと見なされている芸術団については、海外公演を終え帰国した後に帰還公演を行うことがある。平壤学生少年芸術団もそうであった。同団は帰国後の1978年7月2日に、万寿台芸術劇場で音楽舞踊総合公演を行った。この

公演には金日成も参加し公演を観覧した⁽³⁰⁾。このことは同団が特別な芸術団であることを物語っていた。

2) 公演内容

公演は学生代表による挨拶から始まった。北朝鮮の芸術公演のパターンを踏襲し、この挨拶は、まず公演全体の性格を定める説明となっている。次のようであった。

民族の太陽でいらっしやると同時に、60万在日同胞の慈悲深い親でいらっしやる金日成元帥が領導なさる主体の祖国を希望の灯台として描き、民族的尊厳を守りながら強く闘っていらっしやる恋しい私たちのお父さん・お母さん・お兄さん・お姉さん、こんにちは。父なる元帥は、国事にとてもお忙しい中でも、祖国を訪ねてくる在日同胞と学生たちをいつも温かく迎えて下さり、限りなく慈悲深い愛の懷に抱きしめてくださいます。父なる元帥の慈悲深い愛を胸に抱いてかけつけて来た、いろいろな美しい話と新しい革新を創作している皆様たちへ私たちつぼみの心を一緒に込めて、祖国の人民たちが送る最も熱い挨拶をお送りいたします。⁽³¹⁾

この挨拶からわかるように、この公演がメッセージを投げかける第一の対象は在日朝鮮人であった。当時、朝鮮総聯の傘下団体である総聯映画製作所が撮影し編集した『ピョンヤン学生少年芸術団』（総聯映画製作所、1978）を確認したところ、舞台は朝鮮語のみで進行され、日本語通訳はついていない。朝鮮語を解する同胞に向けて公演を行い、祖国＝北朝鮮と在日同胞の紐帯を徹底強化することが公演の第一優先事項だった可能性を指摘できる。もちろん、日本人が多数参加する公演では通訳をつけて逐次通訳形式で公演を行ったことが考えられるが、この点は実際の録画映像を確認できていない。

さて、当日の内容を整理すると次の通りである。公演した会場によってレパートリーや順序は多少違うと考えられるが、表3のような演目が共通して行われた。

内容は、社会主義建設、特に農村の形成が順調に進み生産量が向上していることを表象するようなものが多い。上記の基本的な演目の他に、日本人観客のために「赤とんぼ」など日本の童謡も歌ったという⁽³³⁾。

3) 日本人の反応

朝鮮総聯機関紙『朝鮮新報』1978年5月2日には飛鳥田一雄（日本社会党中央執行委員長）・久野忠治（自由民主党、衆議院議員、日朝友好促進議員連盟会長）・高木健夫（日朝文化交流協会理

事長）・團伊玖磨（作曲家）のコメントが掲載されており、また同紙1978年5月6日3面にも日本人の反応が多数掲載されている。

『朝日新聞』1978年5月22日は次のように報じている。

ひとときわ拍手が大きかったのは、軽音楽「炊事の馬車が走るよ」で、達者な木琴演奏をして見せた少女と、「統一列車が走る」などでアコーディオンを弾いた少年に対して。（中略）合間にはアンコールの形で、日本の童謡を何曲かサービス。よく練習したらしい謡いぶりと、一部はたどたどしい日本語のアクセントで観客の拍手をあびていた。⁽³⁴⁾

このときにアコーディオンを担当したカン・グン Chol（当時8歳）は特に日本のメディアの関心を引いたようで、『読売新聞』はカンに単独インタビューした記事をコラム「人間登場」にまとめて5月16日に掲載している⁽³⁵⁾。5月20日にはNHKが番組で平壤学生少年芸術団の公演を放送したが、それに対して東京在住の視聴者は「すばらしいの一言。8歳から15歳までの少年少女の演奏、歌唱、舞踊のどれもが大人もかなわない熱演で、迫力があつた。舞台を去る時の胸を張った堂々とした姿も印象に残った」とコメントしている⁽³⁶⁾。

『朝鮮新報』に掲載された記事、NHKが放映した番組・『朝日新聞』に掲載された記事においては、公演への評価は非常に肯定的である。NHKと朝日新聞が同公演の後援者であることを鑑みれば、このような反応はある意味当然と言える。一方、『読売新聞』も公演について非常に肯定的に報道している。当時の『読売新聞』も基本的には対北関係については肯定的であったことが伺える。

3-2. 第2回日本公演（1983年）

1) 行程

第2回公演も主催は日本・朝鮮文化交流協会であり、後援はNHK・朝日新聞が行った。東京公演の時は東京都が後援についた。『朝日新聞』（1983年3月26日）は、夕刊3面の上半分をす

表3 第1回公演の内容⁽³²⁾

第1部		
1	合唱	金日成將軍の歌 (김일성장군의 노래)
2		世の中にうらやむものはない (세상에 부럽이 없으라)
3	舞踊	つつじの花が咲いたので元帥に捧げよう (진달래꽃 피워 원수님께 드리자)
4	チャンセナブ (장세남) 独奏	豊年を迎えた金剛村よ (풍년든 금강마을)
5	三重唱	愛の楽器で私たちの幸福を歌います (사랑의 악기로 우리 행복 노래불러요)
6		お母さんが嬉しそうに笑ったら (우리 엄마 기쁘게 한번 웃으면)
7	舞踊	町と村の子ども主人たち (거리와 마을의 꼬마주인들)
8	器楽重奏	ノドゥルの川辺 (노들강변)
9	男性独唱	金日成元帥の懷に抱かれわれわれは幸せです (김일성원수님 품에 우리는 행복하리라)
10		輝け、わが平壤 (빛나라 우리 평양)
11	アコーディオン独奏	統一列車が走る (통일열차 달린다)
12	童話舞踊	熊に勝ったミツパチたち (곰을 이겨낸 꿀벌들)
第2部		
13	伽耶琴独奏	峇の春 (초소의 봄)
14	舞踊	チャンゴと鈴 (장고와 방울춤)
15		ウサギのお山に豊年太鼓が響きます (토끼동산에 풍년북소리 울려요)
16	女性重唱	愛のアコーディオンを抱いて歌います (사랑의 손품금 안고 노래 불러요)
17		少年団立よいね (소년단립 좋아라)
18	軽音楽	朝鮮民謡トラジ (조선민요 도라지)
19		駕籠馬車が走る (가마마차 달린다)
20	女性独唱	万景台は花の丘 (만경대는 꽃동산)
21		景色もよいけど暮らしもよいね (경치도 좋지만 살기도 좋네)
22		金剛山の木蘭の花 (금강산의 목란꽃)
23	舞踊	兒童団遊戲隊 (아동단유희대)

べて平壤学生少年芸術団第2回公演の紹介に使用した。伊藤正孝記者が平壤で撮影した写真(公演の様子と団員のプライベートとされる様子)を掲載した。

平壤学生少年芸術団は1983年4月3日、中国民航機で成田空港に到着した。日朝文化交流協会を代表して新谷のり子が花束贈呈を行った。『朝日新聞』は芸術団を「朝鮮民族の伝統に、社会主義国らしい健康さをミックスした歌と踊り」⁽³⁷⁾と評した。この時のメンバーには、後に、普天堡電子楽団の独唱歌手として注目を浴びる金光淑が含まれていた⁽³⁸⁾。

4月6日には、平壤学生少年芸術団のリサンデ団長、カンジュイル顧問ら5人が朝日新聞社東京本社を訪問し、渡辺誠毅社長・中江利忠編集局長と懇談した。リサンデは「文化交流を進めたい」と強調し、渡辺は1973年の万寿台芸術団日本公演に言及しながらも「今回も成功することを期待」と述べた⁽³⁹⁾。この後、4月8～9日(五反田・簡易保険ホール)、4月10日(立川市民会館)、6月3～4日(渋谷NHKホール)などの公演を行った。公演は、4月8日から6月7日まで、日本の各都市で開催された。

表 4 第 2 回日本公演の内容⁽⁴⁰⁾

第 1 部		
1	合唱	金日成將軍の歌 (김일성장군의 노래)
2	合唱	わが祖国 (나의 조국)
3	舞踊	花の種をまきましょう (꽃씨를 뿌려요)
4	独唱と伴奏	私は花のつばみ (나는야 꽃봉오리) 日本の歌 はまちどり 朝鮮民謡「ノドゥルの川辺」(조선민요 노들강변)
5	舞踊	児童伝説舞踊「金剛の兄妹」(아동 전설 무용 금강의 오누이)
6	タンソ (단소) 独唱	春の春 (초소의 봄)
7	舞踊	祝日の朝 (명절의 아침)
8	女性重唱	アコーディオン弾きとうぐいす (손풍금수와 피클새) われらの誇り限りない (우리 자랑 이만 저만 아니라고)
9	舞踊 (独舞)	独楽踊り (팽이춤)
10	伽耶琴独奏	職場の憩い (일터의 휴식)
11	体操舞踊	楽しい登山キャンプ (즐거운 등산 야영)
第 2 部		
12	チャンセナブ独奏	平北寧辺歌 (평북녕변가)
13	二人舞	チャンゴと鈴 (장고와 방울)
14	ギター独奏	遊戯 (유희놀이)
15	仮面舞	栗の木山 (밤나무동산)
16	三重奏	学びのわが国は本当によいです (배움의 내 나라 참말 좋아요) 日本の歌 春が来た
17	軽音楽	朝鮮民謡 陽山道 (조선민요 양산도) 雲の中に消えた馬車 (구름속으로 사라진 마차)
18	男性独唱	輝け、わが平壤 (빛나라 우리 평양) 日本の歌 赤とんぼ
		私たちは朝鮮の子どもたちだ (우리는 조선의 아들 딸이다)
19	舞踊	わが村に豊年が来ました (우리 마을에 풍년이 왔어요)

2) 公演内容

以下に第 2 回日本公演で行われた演目を整理した。公演した会場によってレパートリーは多少違うものの、表 4 のような演目が行われた。

第 2 回公演は、第 1 回よりも演目の幅広さが目立った内容になっていた。女学生が二人一組で司会を務めたが、一人が朝鮮語で進め、もう一人が日本語の逐次通訳を受け持つという形になっていた。

内容は、第 1 回目と同様に社会主義社会における農村の発展を表現した演目（「わが村に豊年が来ました」）もあるが、全体的には農村生活を前

面に押し出さずに、豊かな都市生活や課外学習を楽しむことを表現した演目が増えた。例えば、舞踊「祝日の朝」は、現代的な都市生活を舞踊で表現したものであり、踊り手は女子学生 4 人である。書き割り（舞台背景）から推察するに平壤の生活を表現したものであろう。また、体操舞踊「楽しい登山キャンプ」は、妙香山のキャンプ場で楽しむ子どもたちを表現し、健康的で明るい課外学習をイメージさせている。伽耶琴独奏「職場の憩い」は、北朝鮮社会における労働の限りない喜びと楽しい休憩の様子を表現したものであり、社会主義社会における労働を表象している。公演を通して

社会主義は健全・幸せであるというイメージを形成していると指摘できる。

一方、在日同胞向けに、女性重唱「われらの誇り限りない」を入れてもいる。この曲は朝鮮総聯の行事でよく歌われる歌である。また、日本人観客向けに、日本の童謡なども披露した。

なお、「私は花のつぼみ」「日本の歌 はまちどり」「朝鮮民謡 ノドゥルの川辺」を独唱したチョンヘヨンは、その後に普天堡電子楽団の代表的な歌手となり、1991年に日本公演のために再び来日している。平壤学生少年芸術団のメンバーとして来日した学生たちの中には、チョンヘヨンのように普天堡電子楽団のメンバーとして再来日する人物も何人か確認できる（하승희 2020: 187）。

3) 日本側の反応

日本のマスメディアを確認する限り、第1回目公演よりも感想は見当たらないが、例えば石川県在住の主婦（50）のコメント「芸のよさはもちろんですが、何よりも少年少女たちの顔がすばらしいです。主役もバックの子供たちも実に表情が豊かで、私たちが日常忘れていた表情の大切さを思

い出させてくれました。不思議に魅力的な笑顔でもう夢中で見入りました」⁽⁴¹⁾ など素直な感想を述べているものがあつた。

なお、この日本公演の直接的な影響があるのか論証は困難だが、1983年5月29日にソウルで開催された第8回南北赤十字本会談で、北朝鮮側は芸術団の南北相互派遣を重要なテーマとして韓国側に繰り返し要請し、南北で原則合意した⁽⁴²⁾。9月12日は、公演会場候補（ソウル国立劇場と平壤大劇場）と視察実施についても合意した⁽⁴³⁾。北朝鮮が、対日施策としての芸術団による文化外交のみならず、対南政策としても文化攻勢を強めようとしていた意思が確認できる。

3-3. 第3回日本公演（1986年）

1) 行程

主催は日本・朝鮮文化交流協会、後援は朝日新聞社・NHKであることは第1回目・第2回目と変わらない。芸術団の構成は学生62人、団長ら役員および教員19人（計81人）⁽⁴⁴⁾ となり、第1回目・第2回目と比べて多少小規模となった。団

表5 平壤学生少年芸術団第3回日本公演（1986年）の行程⁽⁴⁶⁾

5月24日	平壤	平壤学生少年芸術団が平壤を出発。
5月28日	東京	東京に到着。 朝鮮総聯主催の歓迎会開催。梶谷善久（日朝文化交流協会理事長）などが参加。
5月30日	東京	朝鮮総聯中央歓迎委員会主催の午餐に参加。 崔龍海（団長）ら団代表団（以下、崔らとする）がNHKを訪問。
5月31日	東京	東京で開催されている高句麗文化展を参観。
6月2～4日	東京	【2日】 団員の代表数名が谷洋一（日朝友好促進議員連盟会長代理）と面会。 東京公演開催（芝・東京郵便貯金ホール）。石橋政嗣（日本社会党中央執行委員会委員長）らが観覧。 【3～4日】 東京公演開催（青山・日本青年館） 【4日】 崔らが朝日新聞社本社を訪問。中江利忠（朝日新聞常務）と懇談。
6月6日	千葉	崔らが千葉県庁を訪問。副知事と面会。
6月7日	埼玉	埼玉公演開催 南浦和小学校・高砂小学校などとの交流。 崔らが埼玉県議会を訪問。畑和（知事）および笠原正三（議長）・斎藤正次（議員、日朝友好促進埼玉県議会議員連盟会長）と面会。
6月8～9日	東京	【8日】 三多摩朝鮮第一初中級学校を訪問。 【9日】 崔らが東京都昭島市市役所を訪問。 崔らが三多摩地域歓迎委員会主催の宴会に出席。

6月11～14日	愛知	【11日】 愛知公演開催。須川久（全日本音楽教育研究会協会会長）、奈良泰夫（毎日新聞社中部本社代表取締役）、松岡伶子（松岡バレエ団団長）などが参加。 【13日】 崔が久野忠治（日朝友好促進議員連盟前会長）と面会。 【14日】 総聯の愛知公演歓迎委員会に出席。 愛知朝鮮中高級学校を訪問。 【日付不明】 副団長らが愛知県庁および名古屋役所を訪問。
6月15～19日	大阪	大阪公演開催 【16日】 崔らが大阪府庁および大阪役所を訪問。岸昌（大阪府知事）および大島靖（大阪市長）と面会。 ・団員が朝日放送（大阪）の番組に出演。 【17日】 大阪府民有志による午餐会に参加。 崔が上田繁潔（奈良県知事）と面会。 【19日】 大阪朝鮮高級学校を訪問。大・朝鮮文化会館（大阪）で、朝鮮学校学生および在日同胞のための特別公演開催（2回）。
6月20～22日	京都	【20日】 崔らが京都府庁および京都市役所を訪問。荒巻禎一（知事）と今川正彦（京都市長）と面会。 崔らが放送会館（京都）と京都新聞社を訪問。 崔龍海団長が日本の青年団体が主宰する懇談会に参加。 副団長が寿岳章子（京都府立大学教授）らによる懇談会に出席。 【21日】 崔らが宇治市役所訪問。池本正夫（市長）と面会。
6月23～28日	兵庫	【23日】 崔らが、兵庫公演歓迎実行委員会による歓迎会・姫路市教職員組合による歓迎会・総聯兵庫県本部委員長による歓迎会に出席。 【24日】 副団長らが朝来郡（現、朝来市）の枚田小学校を訪問、交流。 【25日】 崔らが姫路市役所を訪問。戸谷松司（市長）と面会。 【26日】 崔らが兵庫県庁を訪問。三木真一（副知事）と面会。 崔らが、神戸新聞社を訪問。三木良一（神戸新聞社社長）と面会。 崔らがサンテレビを訪問。常務取締役と面会。 【27日】 副団長が神戸市役所を訪問。 【28日】 団員が東神戸朝鮮初中級学校を訪問。
6月29～30日	広島	【6月29日】 団員が平和公園・平和祈念資料館を訪問。 【6月30日】 崔らが広島県庁および広島市役所を訪問。竹下虎之助（県知事）と荒木武（市長）と面会。
7月1日～4日	山口 福岡	【7月2日】 崔らが下関市役所を訪問。泉田芳次（市長）と面会。 【7月3日】 副団長は北九州市役所を訪問。 【7月4日】 ・崔らが、福岡県庁を訪問。近藤栄次郎（副知事）と面会。 ・崔らが、福岡市役所を訪問。
7月8日	東京	総聯主催の歓送大会が朝鮮文化会館（東京）で開催。
7月9日		朝鮮大学校を訪問。 朝鮮新報社を訪問。
7月12日	新潟	新潟港から万景台号に乗船して帰国（14日に元山港到着）

長は崔龍海（朝鮮社会主義労働青年同盟中央委員会副委員長）が務めた。

第3回目の日本公演は、14都市において36回開催し、朝鮮総聯は、公演の成果を総聯第14回全体大会につなげることを強調した⁽⁴⁵⁾。

第3回公演の行程では、公演はもちろんだが、団長ら団幹部が積極的に地方自治体の長らを訪問し、対面での意見交換を通した「外交」を第1回・第2回以上に展開しているように見える。また、日本の学生との直接交流の機会を引き続き持ったことも注目に値する。平壤学生少年芸術団の目的の一つは、他の芸術団と違い、北朝鮮の教育制度の優越性を学生の実力を通して見せつける

こと一つまり「主体教育の結実をみせる輝かしい芸術」⁽⁴⁷⁾ —であったが、これを直接交流によって日本人にも体感してもらい、好意を勝ち取ることが実践されたと解釈できる。

2) 内容

第3回公演の内容は表6の通りである。第1～2回公演よりも、エンターテインメントの要素が増えており、また舞踊昔ばなし「頭のはげたオウム」などは、朝鮮語ではなく日本語で進行した。演目において日本の歌謡が大幅に増えたことも指摘できる。

3) 日本側の反応

『朝日新聞』1986年6月13日のコラム「今日

表6 第3回公演の内容⁽⁴⁸⁾

1	合唱	永生不滅の革命頌歌「金日成將軍の歌」(영생불멸의 혁명송가 '김일성정군의 노래')
2	軽音楽	万景台を訪ねて行く (만경대 찾아가네)
3		アリラン (아리랑)
4		日本民謡メドレー
5	女性独唱	日本の歌「ミカンの花咲く丘」、朝鮮民謡「ノドゥルの川辺 (노들 강변)」
6	舞踊	幸せの歌ひびけ
7		ゆかいな子供たち
8	伽耶琴三重奏	早春をうたう (새봄을 노래해요)
9	高音チョッテ (지대) 独奏	われらの東海はすばらしい (우리의 동해는 좋기도 하지)
10	舞踊昔ばなし	頭のはげたオウム (이마 벗어진 앵무새)
11	舞踊昔ばなし	つばさのはえた竜馬 (날개 달린 용마)
12	体育舞踊	大好きな海 (바다는 좋아요)
13	二重唱	朝鮮歌謡「ふるさとの春 (고향의 봄)」、日本の歌「手のひらを太陽に」
14	ギター独奏	金剛山の木蘭 (금강산의 목란)
15	チャンセナプ独奏	牡丹峰 (모란봉)
16	女性重唱	鳥のさえずり
17	女性重唱	なつかしき江南 (그리운 강남)
18	女性独唱	万景台を歌います (만경대를 노래해요)
19		スズランの花 (은방울꽃)
20	童話舞踊	アリとセミ (개미와 매미)
21	アコーディオン独奏	童謡「遊戯 (유희)」を主題とした変奏曲
22		熊んばちの飛行
23	男性舞踊	少年將軍 (소년장수)
24		首領の万寿無疆をお祈りいたします (수령님의 만수무강 축원합니다)

の問題「ジャズ調」は、第3回日本公演について、公演内容が大きく変化したと評価している。「前回までは金日成崇拜などが強く出ていたが、今回は政治色が格段に薄れた」「民謡『アリラン』をもとにしたアンサンブルは、ジャズ調をふんだんにとり入れたもの。『トルコ行進曲』『熊んばち』といった耳なれた曲、それに『みかんの花咲く丘』などの日本の歌も盛りこみ、社会体制の違いを感じさせなかった」「うまく演奏できるとガッツポーズをとる子もいた」と経験的に観察できる変化を描写している。コラムではこの変化の背景として、推測の次元ではあるものの、北朝鮮における合営法の施行（外国企業の誘致）、権力が継承されたことによる体制の安定化などを挙げている⁽⁴⁹⁾。

演出でいえば、このコラムが指摘している通り、それが外国公演でのみ許されたものである可能性があるにせよ、ジャズ調を取り入れたことは大きな変化であると言えよう。北朝鮮音楽界では、ジャズは基本的に禁止であったからである。

また、『朝日新聞』1986年7月6日のコラム「米倉斉加年のわらべうた」では、俳優・演出家・絵本作家の米倉斉加年は公演を次のように高く評価している。

…少年少女たちは実にさわやかに演奏し、歌い、そして踊った。そこには大人のまねはなかった。子供をいじめて仕込んだ大人の技術も見あたらなかった。子供の持つ表現力、素直さが横溢（おういつ）していた。一口でいえば子供らしかった一が、いわゆる学芸会のそれとは違う質の高さを持っている。

民族の伝統的な音楽、踊りが今の子供たちの中に、生き生きと息づいているのは驚きだった。伝統芸能が古いものとしてではなく、また守り受け継ぐという堅苦しさもなく、楽しさの中に躍動的にとらえられていた。⁽⁵⁰⁾

一方で、米倉は第二部最後の演目である「舞踊昔ばなし『つばさのはえた竜馬』」については、原作の絵本を読むと、平和な村を襲い殺戮する海賊は日本の武士として表象されているとし、「こういう敵であった日本人を、日本の子供は知って

いるだろうか」と読者に考慮を投げかけている。

また、『朝鮮音楽年鑑』では「平壤学生少年芸術団に対する反応」が実に18頁にも渡って紹介されている。もちろん、北朝鮮の公式刊行物であるからすべて賞賛する内容であるが、公演を観覧し感想を述べたと記述されている人物が数十人列挙されている。そのうち著名な人物をいくつか抜粋すると次の通りである⁽⁵¹⁾。

石橋政嗣（日本社会党中央執行委員会委員長）・野村良雄（東邦音楽大学学長／音楽美学）・石井昌子（創価大学教授／中国哲学）・清水澄子（日本婦人会議議長）・安川加寿子（東京芸術大学教授、ピアニスト）・高沢寅男（衆議院議員、日本社会党党员）・吉岡徳次（総評副議長、全日本港湾労働組合委員長）・西谷能雄（未来社出版）・早乙女勝元（作家）・山下正子（日本社会党婦人局長）・羽田澄子（映画監督）・多々良純（俳優）・新村猛（名古屋大学名誉教授／フランス文学、言語学）・市川せつ子（舞踊家）・須川久（日本音楽教育研究会協会）・岸昌（大阪府知事）・上田繁潔（奈良県知事）・上田正昭（京都大学教授／日本古代史）・高屋定國（佛教大学教授、国際政治学）・貞松融（貞松・浜田バレエ団団長）・渡辺道子（日朝文化交流協会理事、日本社会党副委員長）・赤松徳治（詩人）・中村茂隆（神戸大学教育学部教授、音楽理論）

地方公共団体の議員まで含めた政界関連では、日本社会党所属の人物が圧倒的に多かったが、自民党所属議員も少なくなかった。また、上記に記した通り、芸術・文化人や学者を多く取り上げていた。

おわりに

以上、平壤学生少年芸術団の第1～3回目の日本公演について、基礎的な資料を基に概要を整理し分析した。日本訪問期間の行程や公演内容を分析した結果、第1～3回目それぞれにおいて多少の差はあるものの、平壤学生少年芸術団は、日本訪問それ自体が北朝鮮と在日朝鮮人の紐帯を強め

たのみならず、公演を観覧する日本人の好意を勝ち取る文化外交を展開したと明確に指摘できる。高度な芸術的力量・華やかな舞台・柔らかい印象を、公演を通して見せつけ、また、メディアへの露出を一定期間連続的に行うことによって好意を勝ち取る点は、1970年代初めまでの万寿台芸術団らの海外巡回公演と同様であるが、児童・学生公演という「純粋さ」が加わることによって、その好意の水準は高いものとなった。この点は万寿台芸術団らとは違う点であった。

また、平壤学生少年芸術団は、その芸術的力量によって、北朝鮮の芸術性と教育体系の優位性を対外的に示す存在であった。特に、教育の質と体系の完成度は社会主義国においては非常に重視される部分であり、韓国はもちろんのこと日本に対しても遅れをとることが許されないと考えてあった。

さらに、日本国内で巡回公演を行いながら時には日本の学校とも交流し、各地域の政治家やメディア関係者と積極的に面会するという直接的な接触を繰り返した。来たるべき日朝関係の変化(国交正常化)のための地ならしをしていたのである。

なお、本研究は基礎的な事例研究に留まっている。今後、日本公演が行われた時期の国際関係のホライズンをより明確な形で示して国際関係史に日本公演を位置づけること、そして平壤学生少年芸術団による他国での訪問公演と比較することで日本公演の特徴をより精緻にあぶりだすことなどが必要となる。これらについては今後の課題とする。

付記：本研究はJSPS 科研費 20H01330 の助成を受けた研究成果の一部である。

〈引用・主要参考文献〉

一次資料

〈新聞・雑誌資料〉

『朝日新聞』『読売新聞』『로동신문』『조국』『조선신보』『조선중앙년감』

〈映像資料〉

総聯映画製作所 1978 『第1回ピョンヤン学生少年芸術団日本公演』

総聯映画製作所 1983 『第2回ピョンヤン学生少年芸術団日本公演』

総聯映画製作所 1986 『第3回ピョンヤン学生少年芸術団日本公演』

二次資料

〈単行本：日本語〉

石井健一・小針進・渡邊聡 2019.『日中韓の相互イメージとポピュラー文化——国家ブランディング政策の展開』明石書店。

姜徹 2002.『在日朝鮮韓国入史総合年表』雄山閣。

佐藤卓己・渡辺靖・柴田康文編 2012.『ソフト・パワーのメディア文化政策—国際発信力を求めて』新曜社。

清水雅大 2018.『文化の枢軸 戦前日本の文化外交とナチ・ドイツ』九州大学出版会。

張雪斌 2019.『日本と中国のパブリック・ディプロマシー—概念変容に伴う新たな競争—』ミネルヴァ書房。

福島安紀子 2012.『紛争と文化外交 平和構築を支える文化の力』慶應義塾大学出版会。

J・ナイ著・山岡洋一訳 2004.『ソフトパワー 21世紀国際政治を制する見えざる力』日本経済新聞出版社。

森類臣 2022.『万寿台芸術団の対日文化外交—芸術と宣伝扇動の相克』『北朝鮮の対外関係—多角的な視点とその接近方法』(中戸祐夫・森類臣編)晃洋書房。

〈単行本：英語〉

Cull, Nicholas. 2009. *Public Diplomacy Foundations for Global engagement in the digital age*, Cambridge, Polity.

Jenkins, Henry. 2020. *Popular Culture and the Civic Imagination: Case Studies of Creative Social Change*, New York, New York Univ Press.

〈雑誌論文：日本語〉

池田慎太郎 2015.「自民党と日韓・日朝関係—冷戦下の党内対立と議員外交—」『現代韓国朝鮮研究』第15号、51-63ページ。

本宮正史 2016.「1970年代第三世界をめぐる南北外交競争と韓国外交」『現代韓国朝鮮研究』第16号、1-13ページ。

崔智喜 2023.「1980年代北朝鮮の対日政治的接近に関する研究—1984年日朝漁業協定再締結から85年川勝訪朝までを中心に—」『アジア研究』69巻1号、1-21ページ。

韓昇熹 2020.「東アジア冷戦と植民地主義批判—日本朝鮮研究所の日朝友好運動論をめぐる対立を中心に—」『アジア太平洋研究』45、109-129ページ。

若杉美奈子 2017.「1970年代前半における北朝鮮「脱陣営」外交と政策展開過程」『アジア地域文化研究』

〈雑誌論文：韓国語〉

김희선 [김비손] 2022. 「리틀엔젤스예술단의 공연예술사적 의미 I: 리틀엔젤스예술단 60년사 시기별 활동과 특징을 중심으로」『무용역사기록학』 65, pp. 63-99.

김희선 [김비손] 2022. 「리틀엔젤스예술단의 공연예술사적 의미 II+: 제도, 운영, 레퍼토리, 국제공연예술사적 맥락을 중심으로」『무용역사기록학』 vol. 66, pp. 29-68.

전영선 [チョンヨンソン] 2011. 「한의 대외문화 교류와 문화외교 연구 -해방 이후 북한 민주건설시기의 북-소 문화교류를 중심으로-」『중소연구』 제 35 권, 제 1 호, pp. 143-163.

전영선 김지니 [チョンヨンソン・김지니] 2007. 「북한 공연예술단체의 대외공연 양상과 특성 연구」『남북문화예술연구』 창간호, pp. 201-233.

전영선, 김지니 [チョンヨンソン・김지니] 2008. 「북한의 대외문화교류 정책과 북·중 문화 교류」『중소연구』 32(2), pp. 123-148.

하승희 [하스ンヒ] 2020. 「북·일 관계와 전자악단의 활용」『현대북한연구』 vol. 23, no. 2, pp. 164-206.

〈博士論文〉

하승희 [하스ンヒ] 2019. 「북한의 악단 변화연구 (1945 ~ 2018)」 북한대학원대학교 박사논문.

(1) 「來日中の国立ピョンヤン芸術団の歌手 キム・オクソン」『朝日新聞』1980年6月22日

(2) 「『평교마』 피플새와 29년만의 상봉」『조선신보』2012년 10월 23일 (<https://chosonsinbo.com/jp/2021/02/14-44/>)

(3) 以下の一連の記事を参照のこと。「〈青商会、挑戦と継承の足跡〉 Ep.5 ピョンコマ公演の実現へ (1) / 「あの時」の感動と興奮を再び」『朝鮮新報』2021年02月09日 (<https://chosonsinbo.com/jp/2021/02/9-17/>)、「〈青商会、挑戦と継承の足跡〉 Ep.5 ピョンコマ公演の実現へ (2) / 学生少年らの姿に成功を確信」『朝鮮新報』2021年02月14日 (<https://chosonsinbo.com/jp/2021/02/14-44/>)、「〈青商会、挑戦と継承の足跡〉 Ep.5 ピョンコマ公演の実現へ (3) / 子どもたちを想う「親心」」『朝鮮新報』2021年02月20日 (<https://chosonsinbo.com/jp/2021/02/20-32/>)、「〈青商会、挑戦と継承の足跡〉 Ep.5 ピョンコマ公演の実現へ (4) / 「主人公」としての自覚」『朝鮮新報』2021年02月27日 (<https://chosonsinbo.com/jp/2021/02/27-56/>)

なお、この公演は開催直前に取り消しとなった。外

務大臣会見記録 (平成14年10月) (https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/kaiken/gaisho/g_0210.html)を参照のこと。

(4) ナイ (2004)、佐藤・渡辺・柴内 (2012)、福島 (2012)、張 (2019)、清水 (2018)、石井・小針・渡邊 (2019)、Jenkins (2020) などがある。

(5) 장철 (1992) 『조국과 더불어』 하, 예술교육출판사, p. 277。

(6) 同上, p. 277。

(7) 同上, p. 277。

(8) 同上, p. 278。

(9) 『朝鮮中央年鑑』などをもとに筆者作成

(10) 「今秋來日公演のピョンヤン学生少年芸術団 ユ・ヨンテク調査団長に聞く」『読売新聞』1986年8月11日

(11) ザ・リトル・エンジェルのホームページ (<http://www.littleangels.or.kr/>) および以下の記事を参照のこと。

「(62シリーズ) 리틀엔젤스 60년 ... 전 세계에 한국 문화 예술 알리다」『시니어오늘』2022년 12월 5일 <http://www.seniortoday.co.kr/news/articleView.html?idxno=12689>

(12) 「韓国少女舞踊団 九日に來日」『読売新聞』1965年12月2日。なお『朝日新聞』1972年11月17日は最初の訪日公演を1968年としている。

(13) 「ザ・リトル・エンジェルス來日 韓国の児童民族舞踊団」『朝日新聞』1970年12月24日

(14) 韓国の国立国楽院も1964年と1969年に日本公演をおこなっている (김희선 2022: 46)。

(15) 「ザ・リトル・エンジェルスが來日」『読売新聞』1972年11月18日

(16) 「異例の長期公演 ザ・リトル・エンジェルス “平和の天使” 三たび來日」『朝日新聞』1972年11月17日

(17) 「現代風のリズム基調に 邪心ない芸術表現『ザ・リトル・エンジェルス』」『読売新聞』1972年12月12日

(18) 同上記事。

(19) 「平和の 天使리틀 엔젤스 世界공연 10주년기념 특별공연」『毎日経済新聞』1976年3月10日

(20) 「우리 나라 평양학생소년예술단조사단이 총련중앙을 방문하였다」『조선신보』1976년 7월 17일

(21) 「北朝鮮から芸術使節 調査団が本社訪問」『読売新聞』7月17日、「우리 나라 평양학생소년예술단조사단 요미우리신문사를 방문」『조선신보』1976년 7월 19일

(22) 「ピョンヤン学生少年芸術団 東京公演／主催読売新聞社 (社告)」『読売新聞』8月10日

(23) 「今秋來日公演のピョンヤン学生少年芸術団 ユ・

- コンテク調査団長に聞く』『読売新聞』8月11日
- (24)「ピョンヤン学生少年芸術団が初来日へ」『朝日新聞』1978年4月26日
- (25)『朝鮮新報』『朝日新聞』をもとに筆者作成。なお、主語が明示されていない項目については、「平壤学生少年芸術団」が主語となる。表中の敬称は省略した。職位は当時のものとなる。当時の職位・肩書については初出の一度のみ記載した。
- (26)「주체 예술의 대화원을 대를 이어 꽃피워 나가도록 이끌어주는 위대한 아버지사랑」『조선신보』1978년 5월 1일 3면
- (27)「평양학생소년예술단의 일본공연은 총련애국사업과 민족교육, 문예사업을 가일층 발전시키는데서 뜻깊은 일로 될것이다 / 대회에서 한 한덕수의장의 연설」『조선신보』1978년 5월 8일
- (28)「조국인민들은 앞으로도 나라의 통일과 민족의 번영을 위한 총련과 재일동포들의 성스러운 애국위업을 견결히 지지성원할거시다 / 대회에서 한 김우중단장의 연설」『조선신보』1978년 5월 8일
- (29)「민주주의적민족교육의 우월성을 크게 과시 / 1978년도 총련 각급 학교 학생들의 중앙예술경연대회가 있었다」『조선신보』1978년 5월 3일
- (30)『조선중앙년감 1979』조선중앙통신사, pp. 174-175.
- (31)総聯映画製作所 (1978)『ピョンヤン学生少年芸術団』(映像資料)
- (32)総聯映画製作所 (1978)『ピョンヤン学生少年芸術団』[映像資料]を元に筆者作成
- (33)「楽しい音楽や踊り 「ピョンヤン学生少年芸術団」各地で公演」『読売新聞』1978年5月9日
- (34)「のどかで陽気な農村を見るよう」『朝日新聞』1978年5月22日
- (35)「[[人間登場]「ピョンヤン芸術団」アコーディオン奏者 カン・グン Cholくん」『読売新聞』1978年5月16日
- (36)「[[放送塔] 迫力ある少年芸術団」『読売新聞』1978年5月28日
- (37)「平壤から少年芸術団」『朝日新聞』1983年4月4日
- (38)「김광숙」『20세기 북한예술문화사전』(<http://nks.ac.kr/Word/View.aspx?id=1607>)
- (39)「리団長ら本社訪問 ピョンヤン芸術団」『朝日新聞』1983年4月6日
- (40)総聯映画製作所 1983『第2回ピョンヤン学生少年芸術団日本公演』をもとに筆者作成
- (41)「[[放送塔] 魅力的ピョンヤン芸術団」『読売新聞』1983年9月28日
- (42)「次回は8月に平壤で 南北朝鮮の赤十字会談閉幕 『一括討議』へ南側譲歩」『朝日新聞』1985年5月29日
- (43)「芸術団の公演会場 南北が合意 平壤放送伝える」『朝日新聞』1985年9月12日
- (44)「少年芸術団が来日」『朝日新聞』1986年5月29日
- (45)音楽年鑑
- (46)『朝鮮音楽年鑑 1987』などを元に筆者作成。なお、主語が明示されていない項目については、「平壤学生少年芸術団」が主語となる。表中の敬称は省略した。職位は当時のものとなる。当時の職位・肩書については初出の一度のみ記載した。
- (47)「평양학생소년예술단 일본방문」『조선음악예술년감 1987』p. 335
- (48)『朝鮮音楽年鑑 1987』や総聯映画製作所 1986『第3回ピョンヤン学生少年芸術団日本公演』などを元に筆者作成
- (49)「今日の問題 ジャズ調」『朝日新聞』1986年6月13日
- (50)「米倉齊加年のわらべうた 天馬とにじのばち」『朝日新聞』1986年7月6日
- (51)『조선음악년감 1987』1987, pp. 346-361